

汝の敵を愛せよ

「『自分の隣人を愛し、自分の敵を憎め。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。しかし、わたしはあなたがたに言います。自分の敵を愛し、迫害する者のために祈りなさい。」 (マタイの福音書5章43～44節)

かつて大阪に「汝のテキを愛せよ」という看板のステーキハウスがありました。そんなテキ(=ステーキ)ならいくらでも愛せるという方もいるでしょう。ステーキハウスの看板なら洒落になりますが、敵を愛するとなると洒落にならないほど困難です。

ただ、一つ覚えておくべきことは、「愛する」とは必ずしも「好きになる」ことではなく、むしろ、愛する対象を「大切にする」ことであり、「尊重する」ことなのではないでしょうか？主イエスは決して敵を好きになれと言っているのではなく、敵やライバルを時に人として重んじなさいと言っているはずです。

あの平昌オリンピックでも、そんなことを垣間見せてくれたシーンがいくつかあったのではないのでしょうか？例えば、女子ジャンプで銅メダルを獲得した高梨沙羅選手のもとに駆け寄って、自分のことのように涙を流してライバルを祝福した伊藤有希選手の姿。あるいは、いい結果を残せた自分のレース直後、次に滑る最大のライバル、韓国のイ・サンファ選手のために、歓喜に湧き上がる日本応援団に対して静粛を促したスピード・スケート女子500m金メダリストの小平奈緒選手の姿勢、などなどです。

ちなみに、ライバルの語源は“リバー”、すなわち「川」です。一つの水源地を巡って二者が対立したことから、そうなったとされています。願わくば、ライバルの窮地を「対岸の火事」とせず、愛の手を差し伸べる者になりたいものです。そのような人は、仮に試合に負けても、人生において勝利者となれるのではないのでしょうか？

前を向く

「さて、天に上げられる日が近づいて来たころ、イエスは、エルサレムに行こうとして御顔をまっすぐに向けられ(た)。」 (ルカの福音書 9 章 51 節)

あの未曾有の被害をもたらしました東日本大震災から、今日(2018年3月11日)で七年になります。今なお故郷に帰れなかったり、行方不明者の方々も大勢おられます。また、心に大きな傷を持ち、日常生活もままならない方が少なくないようです。そんな中、被災地や被災者の中から頻繁に上がった声、現在も上がり続けている声は、「前を向く」です。大変な中であって後ろを振り返りつつも、少しずつ「前を向く」。

上掲のみことばにありますように、主イエスも十字架が待つエルサレムに向けて、前を向く、すなわち、「御顔をまっすぐに向けられ」ました。また、使徒パウロも、度重なる裁判の席上、決して後戻りすることはなく、最終目的地であるローマに向けて、前を向きました。すなわち、彼は「カイザルに上訴し」(使徒 25:11)たのです。

私たち人間はともすると後ろを向きがちです。心理学者エリック・エリクソンは言っています、「人は90%の過去とわずか10%の現在に生きている」と。ゆえに、主(の使い)はロトやその妻に言いました。「うしろを振り返ってはいけない」(創世記 19:17)。また、主イエスは、即座に従うことを躊躇する人に言いました。「だれでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくありません」(ルカ 9:62)。

ぜひ、私たちは大変な中にも少しずつ“前を向く”ことをして参りましょう。そんな私たちの前には必ず主が先立って下さいます。ゆえに、ダビデの如く「私はいつも、私の前に主を置いた」(詩篇 16:8)と告白させていただきます。また、「信仰の創始者であり、完成者であるイエスから目を離さないでい」(へブル 12:2)きましょう。

置かれた場所で咲こうとすることの意義

「あなたの行く所どこにおいても、主を認めよ。そうすれば、主はあなたの道をまっすぐにされる。」
(箴言 3 章 6 節)

カトリックのシスターだった渡辺和子さんの名著『置かれた場所で咲きなさい』は、キリスト教界のみならず、一般社会でも多くの読者を得ました。そして、多くの人々が、自分が置かれた場所、自分に与えられた環境で、腐らずに、そこででき得る最善を尽くすことを誓ったのではないのでしょうか？

先日、閉幕いたしましたピョンチャン冬季オリンピックで、まさに、置かれた場所で咲く、すなわち、与えられた環境でベストを尽くすことの意義を改めて考えさせられる一コマがありました。それはスピードスケートのショートトラック女子 3000 メートル・リレーの 5～8 位決定戦でのことです。

優勝候補だったオランダは、準決勝で転倒し、惜しくも決勝には進めず、5～8 位決定戦に回ることになりました。メダルを逃したことで、選手たちのモチベーションもかなり下がってしまったのではないのでしょうか？しかしながら、オランダの選手たちは、置かれた場所、与えられた 5～8 位決定戦という環境で、最善を尽くしました。何と彼らは、世界新記録を達成したのです。5 位で世界新記録達成という奇妙な結果になりました。しかしながら、その後、もっと奇妙なことが起こったのです。

なんとそんなオランダ・チームに、銅メダルが転がり込んで来たのです。もちろん、それは世界新記録のためではありません。実は、決勝に進出していたカナダと中国が失格になり、それで五位のオランダが三位に繰り上がったのです。もし、オランダ・チームが腐って、5～8 位決定戦で手を抜いていたら、メダルはなかったでしょう。

ハローキティに口が描かれない訳

「私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人に行ないがないなら、何の役に立ちましょう。そのような信仰が人を救うことができるでしょうか。」
(ヤコブの手紙2章14節)

ハローキティをご存知ですか？サンリオでデザインされた猫をモチーフにしたキャラクターで、向かって右側の耳に赤いリボンが付けられているのが特徴です。御茶の水にも、大ファンがいらっしやいますよね。

あのハローキティ、正確にはキティ・ホワイトには、実は口が描かれておりません。なぜなのでしょう？サンリオのホームページにある“いちごの王さまからのメッセージ”で、筆者であるサンリオの社長、辻信太郎さんは以下のように述べています。

みなさん、キティちゃんのお顔をよく見てください。キティちゃんにはお口が描かれていませんね。どうしてなのでしょう？目や耳やお鼻はあるのに、お口が描かれていない・・・それには理由があるのです。

実はそこには、やさしさや思いやりは口(言葉)で言うだけでなく、態度で示しましょう！というメッセージが込められているのです。

困っている人には、相手の気持ちになって自ら進んで手を差し伸べて助けてあげることが必要だと、キティちゃんは私たちにそっと教えてくれているのです。

信仰にも全く同じことが言えるのではないのでしょうか？上掲のみことばに身を正しつつ、私たちの信仰も、口(言葉)で言うだけでなく、態度でこそ示したいものです。

「自分の十字架を負う」とは？

「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。」（マタイの福音書 16 章 24 節）

日本におけるアシュラム運動(=祈りとみことばの静聴やその分かち合いの時を大切にする信仰復興運動)の推進者として知られる“ちいろば牧師”こと、榎本保郎牧師の著書を読み返していましたら、上掲のみことばに関する興味深い解釈が紹介されておりました。それによれば、「自分の十字架を負う」とは、あたかも、自分に課された苦難を引き受けるようにと解釈されがちですが、実のところ少し違うのではないかというのです。

確かに、私たちは十字架についてはおりませんし、それ以上に、十字架につけられる必要がありません。私たちが十字架につけられなくていいように、裁かれなくていいように、主イエス・キリストが私たちの代わりに贖いの十字架について下さったのではないのでしょうか？ゆえに、私たちが真に負うべきなのは、自分の苦難ではなく、むしろ、自分に対する主の十字架の恵みではないかというのです。つまり、自分のためになされた主の十字架の贖いと赦しの恵みをしっかりと覚え、それに応えていくことこそが、「自分の十字架を負う」ことに他ならないのではないのでしょうか？

そのように考えますと、私たちは何とか頑張って自分を捨て、無理して自分の苦難を背負うのではなく、むしろ、頑張る自分から解放されて、主の十字架に現わされる神の恵みをしっかりと受け留めつつ、それに喜んで応えていくということが求められているのではないのでしょうか？そのような中で、場合によっては、上掲のみことばに続くみことば(25 節)にありますように、主のために肉のないのちを失う(=差し出す)ことができ、真のいのち、霊のないのちを見い出すことができるのかもしれません。

宝の箱をあけて～賜物を活かす～

「それぞれが賜物を受けているのですから、神のさまざまな恵みの良い管理者として、その賜物を用いて、互いに仕え合いなさい。」

(ペテロの手紙第一 4 章 10 節)

キリスト降誕の際、東方の博士たちは特別な星に導かれてやって来て、幼子イエスを拝して、「宝の箱をあけて、黄金、乳香、没薬を贈り物としてささげ」(マタイ 2:11)しました。一つの可能性として、これらの贈り物は、占星術師とも考えられている博士たちの商売道具だったと言われています。東方の博士たちは、メシア＝キリストに出会った大きな喜びゆえ、大切な商売道具を放棄して、彼らが帰って行った「別の道」(マタイ 2:12)に象徴される新しい歩へと出て行ったのかもしれませんが。いずれにしても、彼らは「宝の箱をあけて」、持っていたもの、与えられていたものを喜んで差し出しました。そして、それらは彼らの思いを越えて、イエス・キリストの王性(←黄金)、神性(←乳香)、そして、贖いの死(←没薬)を暗示するものとなったのです。

あの使徒パウロも、その「宝の箱をあけて」、彼に与えられていたものを喜んで神の前に差し出しました。それらを有効に用いたのです。パウロには、生粋のユダヤ人としての血が流れていましたし、ヘレニスト・ユダヤ人としてギリシア語を話す能力が与えられていました。さらに、パウロは、当時ユダヤ社会を含む地中海世界を支配していたローマ帝国の市民権を保持していたのです。このユダヤ人としての出自、ギリシア語使用、そして、ローマの市民権保持は、彼がその福音宣教を展開するにあたり、大いに意味があったのです。主はあらかじめそれらを備えていて下さいました。

同様に、神様は、あなたに、そして、御茶の水キリストの教会に、あらかじめ賜物を備えて下さっています。さあ「宝の箱をあけて」、それらを有効に用いましょう！

救いの喜びを分かち合うという使命

「『家に帰って、神があなたにどんなに大きなことをしてくださったかを、話して聞かせなさい。』そこで彼は出て行って、イエスが自分にどんなに大きなことをしてくださったかを、町中に言い広めた。」

(ルカの福音書8章39節)

先日、チルドレンズホーム招待の後片付けを終え、所用で両国に出かけたのですが、改札を出るなり、凄まじいフラッシュに私は立ち止まらざるを得ませんでした。すると、目の前を大勢の記者たちやサインをねだるファンたちにもみくちゃにされながら、大相撲初場所で千秋楽を待たずして平幕優勝を果たした“栃の心”が歩いているではありませんか？欧州はジョージア(旧呼称：グルジア)出身の苦労人で、大ケガで幕下まで落ちた後、見事、復活を遂げた力士で、まさに、たった今、優勝を決めたばかりだったのです。「角界のニコラス・ケイジ」と言われる端正な顔立ちには満面の笑みが湛えられておりました。後のインタビューで、何度も周囲への感謝と自らの喜びを余すところなく正直に語る彼の言葉は、多くの人々を惹きつけたに違いありません。ちなみに、母国で生まれたばかりの愛娘「アナスタシア」は復活という意味です。

栃の心は大相撲の初優勝の喜びを分かち合いましたが、私たちキリスト者には、それに勝る救いの喜びを分かち合うことができるのです。栃の心は賜杯を抱いた喜びを分かち合いましたが、私たちキリスト者は永遠の命をいただいている喜びを分かち合うことができるのです。栃の心は幕下陥落の悪夢からの復活(=復帰)の喜びを分かち合いましたが、私たちキリスト者は絶望の滅びから救われた希望の喜び、また、死んでも生きるという真の“復活”の喜びを分かち合うことができるのです。

さあ、今週もぜひ、そんな救いの喜びを分かち合うという使命を果たして参りましょう！

ブラッドバリーした私たち

「このように、あとの者が先になり、先の者があとになるものです。」

(マタイの福音書 20 章 16 節)

まさに、上掲のみことばを地で行くような出来事が起こりました。今から 16 年前のソルトレークシティ・オリンピックでのことです。スケート種目のショートトラック 1000m に出場したオーストラリアのスティープン・ブラッドバリー選手はさほど期待はされていませんでした。ただ、一回戦は対戦相手にも恵まれ、接戦となり、幸運にも一位通過して準決勝へと駒を進めました。ところが、つづく準決勝では優勝候補を含む強豪ぞろいで、案の定、彼は終始、最下位の四位を滑走。上位二選手が決勝に進むため、決勝進出は絶望的と思われた終盤で一人の選手が転倒し、なんと三位でゴール。それでも決勝進出は無理なはずでしたが、転倒した選手を妨害したとして二位の選手が失格となり、ブラッドバリー選手は柵ぼたで決勝進出を果たしたのです。そして、五人の選手で争われた注目の決勝ですが、今まで幸運に恵まれた彼も、さすがに実力の差は歴然で、ダントツの最下位を疾走します。そんな諦めムードの中、先を滑る四人がゴール目の最終コーナーを曲がったところで、一人の選手がバランスを崩し転倒、集団で一緒に滑っていた他の選手も次々とドミノ倒しのように転倒し、ついにブラッドバリー選手の前には誰もいなくなり、何と彼は漁夫の利の勝利、奇跡の優勝を果たし、母国に南半球初の冬のオリンピック金メダルをもたらしたのです。

ちなみに、オーストラリアでは現在、彼にちなんで「ブラッドバリーする」という俗語があり、それは「信じられない祝福にあずかる」ことを意味するそうです。まさに、私たちクリスチャンは、神の恵みにより“ブラッドバリー”されたのですね!?

隣人になる！ ～ホーム招待に向けて～

「『この三人の中でだれが、強盗に教われた者の隣人になったと思いますか。』彼は言った。『その人にあわれみをかけてやった人です。』するとイエスは言われた。『あなたも行って同じようにしなさい。』」

(ルカの福音書 10 章 36～37 節)

いよいよ今週の土曜日(1/27)に茨城県は那珂市額田にあります児童養護施設「チルドレンズホーム」の子供たちを招いて、主にある交わりの時を持つ、いわゆる“ホーム招待”の 때가持たれます。御茶の水キリストの教会の創立に大きく関わった O.D. ビクスラー兄が、チルドレンズホームの草創期にも大いに関わった関係もあって、この“ホーム招待”は始まり、そこには五十年以上の歴史と伝統があります。チルドレンズホームに詳しい鈴木信兄の記録の記憶によれば、大雪によるやむを得ない中止をはさんで、今回で 56 回目になるそうです。また、かつて御茶の水では「“ホーム招待”が終わらないと正月が来ない」とまで言われた、大きな教会行事の一つなのです。

ところで、なぜ、この“ホーム招待”は行われるのでしょうか？・・・誤解していただきたいのですが、これは教会が行なう(単なる)慈善事業ではないということです。普段、親や家族から離れて暮らすホームの子供たちが、たとえわずかな時間ではあっても、神の家族の温もりを少しでも感じてもらいたいために行なうのです。また、そのために、私たちが愛と信仰を発揮して、子供たち一人一人の「隣人になる」ことを実践する時でもあります。それゆえ、この“ホーム招待”においては、自分自身がどう思うか以上に、子供たちがどう感じるかを重視していただきたいのです。

もちろん、毎年この“ホーム招待”に関わった兄姉が異口同音に言うように「子供たちから元気をもらえる」ことは言うまでもありません。さあ、隣人になりましょう！

過去を用いて下さる主

「これを見たシモン・ペテロは、イエスの足もとにひれ伏して、『主よ。私のような者から離れてください。私は罪深い人間ですから。』』と言った。・・・イエスはシモンにこう言われた。『こわがらなくてもよい。これから後、あなたは人間をとるようになるのです。』」

(ルカの福音書5章8節および10節b)

今、まだ新年の雰囲気の間、私たちはいい意味で過去と決別し、前をこそ向いて進んでいこうとしているのではないのでしょうか？それはそれでとても尊いことだと思います。何しろ、心理学者のエリック・エリクソンは「人は90%の過去とわずか10%の現在に生きている」と言っているくらいですから・・・。

しかしながら、逆に、過去を全否定されてしまうのも、いかなるものでしょうか？よくクリスチャンになったばかりの兄弟姉妹に対して、主にある新しい人生のすばらしさを強調したいがために、過去を全て否定すべきであるかのように言うてしまうことがあるかと思えます。確かに、勢いパウロがそのような言い方をしていること(⇒ピリピ3:8)も見受けられます。ただ、やはり、それもあくまで「キリストを知っていることのすばらしさのゆえ」なのです。むしろ、上掲の場面を通して、主は、私たちの過去をいい意味で用いられるお方であることを覚えたいと思えます。すなわち、主はシモン・ペテロの生涯を全否定することなく、かつての漁師としての歩みを活かして、魚をとる漁師から人間をとる漁師へと召されているのです。パウロの過去をも主が用いられたことは言うまでもありません。その律法(=旧約聖書)や(ユダヤ教)信仰への熱心さを、キリストを宣べ伝える伝道者として大いにお用いになったのです。・・・そして、もちろん、あなたの過去も！

どこから来て、どこへ行くのか？～歴史に学び、ビジョンを抱きつつ、今を生きる～

「主の使いは、荒野の泉のほとり、シュルへの道にある泉のほとりで、彼女を見つけ、『サライの女奴隷ハガル。あなたはどこから来て、どこへ行くのか。』と尋ねた。」
(創世記 16 章 7～8 節)

主にあつて新年おめでとうございます。今年も何卒よろしくお願ひいたします！ちなみに、今年 2018 年は、御茶の水キリストの教会がこの地に誕生して、七十年の節目を迎えます。言うなれば、教会創立七十周年ということになります。

このような節目の時は、往々にして、過去の栄光に浸ったり、あるいは、お祝いムードに浮かれる傾向があるものです。しかしながら、私たちは決してそのようなことにのみ終始することなく、むしろ、大いに過去の歩みから教訓を得、また、しっかりと将来の展望を見据えつつ、“今” いかに行動すべきかをこそ、じっくりと考えたいと思います。そこで今年のテーマ「歴史に学び、ビジョンを抱きつつ、今を生きる」。

上掲のみことばには、あのアブラ(ハ)ムの妻サラ(イ)の女奴隷ハガルが主人のもとを追われ、身重であったにも関わらず故郷エジプトへ至る荒野を一人寂しく彷徨っていた時に、主の使いによって呼び止められ、問い掛けられた問いが記されております。すなわち、主(の使い)はハガルに対して、その名を呼び、「あなたはどこから来て、どこへ行くのか」と問うているのです。

ここで主は、まず第一に「どこから来て」、即ち、なぜこうなったのか、過去を顧みてみなさいと問うています。そして、第二に「どこへ行くのか」、即ち、今後どうするつもりなのか、将来のことを熟慮しなさいと促しています。そうして、“今” どうすべきかを考えて行動しなさいとおっしゃっているのではないのでしょうか？